

〈目指す学校像〉

～そこに美がある～「挨拶・清掃・歌声」を大切にする学校



## 《支援》

今年度、1年間の最後のひと月を迎えました。

1, 2年生は次の学年への大きなステップとして、3年生は義務教育最後の残り少ない時間を大切にしていきたいと思います。今月は「支援」を通して皆さんに伝えたいことを記します。

1月は「行く」、2月は「逃げる」、3月は「去る」というように、あつという間の3学期。いよいよ最後の月を迎えました。これまで共に過ごした仲間や場所への感謝を忘れずに、まさに、学年末の『有終の美』を飾ってほしいと思います。

3月というと過去の出来事として忘れてはいけないことが2011年3月11日、14時46分に発生した東日本大震災です。多くの人々が犠牲となった大災害、皆さんはまだ生まれるか、生まれて間もない頃でした。それから13年後、2024年1月1日、16時10分に能登半島地震が発生しました。地震発生から約2ヶ月、能登地方では未だに多くの方が避難所での生活を続けています。謹んでお見舞い申し上げます。

先の東日本大震災でも、今回の能登半島地震でも、国や民間からはたくさんの方の支援が行われています。皆さんの中にもすでに募金など協力をした人がいるのではないのでしょうか。そのような支援をはじめ、私たちにできることがあると思いますが、この「支援」について、私自身の経験から皆さんにも考えてもらいたいと思います。

東日本大震災が発生し甚大な被害を受けたあと、日本中で「自分も何かしなくてよいのか……」という気持ちに駆られた人も多く、募金や物資の提供、救援活動などさまざまな支援が行われました。当時、美術館に勤務していた私は、被災地の美術館や学校関係の方から多くの情報を得ることができ、どの方からも津波や倒壊で物がなくなり授業ができないことや避難先でも子どもたちの表現活動ができずに困っているという声を数多く聞きました。

そこで、埼玉県内の美術館の人たちと連携して、美術教育のネットワークを利用し、全国の学校の美術室にある未使用のスケッチブックや絵の具のセットを提供してもらうよう呼びかけました。その結果、スケッチブックだけで約4,000冊、絵の具のセットが約250セット、そのほかの画材など多数集まりました。中には1995年の阪神淡路大震災の時にたくさんの方の支援をいただいたという兵庫県の先生方が多くの画材を送ってくれた例もありました。そして私たちは、集まった画材を授業や活動で必要とする方からの連絡を待ち、そこに届けるようにしました。結果、避難した先の学校や施設で活動したいという方からの連絡により、それぞれの場所に全ての画材を必要なだけ届けることができました。

このようなことから考えると、支援をしたいという人の思いと支援を必要としている人の思いは必ずしもイコールではないということを思います。例えば善意であっても一方的な支援はかえって被災地（相手）の負担となり、せつかくの思いが伝わらなくなります。また、支援を受けたいという思いを聞けない（感じ取れない）状況があれば生活の回復や復興も進みません。「支援」をすることは、想像力を働かせ、相手の立場や思いを受け止めてそのためにできるサポートをすることです。相手の立場や何が必要かを考えることが大切です。これは日頃から自分の感覚を磨くことでその思いはより強くなり、必要な時に必要な存在になれるように思います。今回の能登半島地震では、私もすぐできる募金、そして知人が営む能登町の飲食店で必要だと聞いた紙食器などを送らせてもらいました。もちろん、ニーズはこれだけではなく、まだまだ必要だと思いますが……。

このように災害時行った支援について紹介しましたが、災害に限らず「支援」という言葉を私たちはいろいろな場面で聞くと感じます。そのような時、自分が『相手の立場に立ち、必要な時に必要になれる人、必要とされることに応えられる人』でありたいと考えます。そのためにも皆さんには、今のこの時間を大切に、日頃の学校生活や活動の中で自分の感覚を磨き続けてほしいと願っています。